猫花文庫

no.151-153

さよならトシオ君

佳(Kei)作

猫花書店

猫花文庫

no.151-153

さよならトシオ君

佳(Kei)作

猫花書店

マルぽ

猫達によって綴られる小さなおはなし
お好きなときに　お好きな場所で
ゆるりとお楽しみくださいませ
本日は
遠い未来のおはなしです

Copyright © nekobana_Kei, 2011

さよならトシオ君

「よし、成功だ」
妙に落ち着き払ったS教授の呟きと、それに続く歓声。
それが、私の記憶に残っている最初の音声だ。
私はゆっくりと起き上がり、ずっと昔からそうしてきたかのように、大きく伸びをして、ひとつ欠伸をした。
「さあ、君の名前を行ってごらん」
S教授は私に優しく言った。私は答えた。
「私はバアル。コードネーム C-Q138-001。世界初の人間の知能を持ったネコ型ロボットです」
「よろしい」
教授は満足げに笑って、私の頭を撫でた。私はごろごろと喉を鳴らした。
「君はこれから、大いに活躍するだろう。人間の助け

となり、癒しとなって、社会を豊かにしてくれるだろう」
「はい、それが私の使命ですから」
私は信頼を込めて、S教授を見つめた。
過去に類を見ない研究が大成功し、全世界が注目しているというのに、教授の顔は、何故か悲しげに見えた。

＊　＊　＊

「ねこちゃん、おいで、おいで」
ベッドの上から、トシオ君が呼んだ。
私は軽々とベッドの上に飛び乗り、トシオ君の枕元に座った。

「はじめましてトシオ君。私はバアルといいます。どうぞよろしく」

「僕、トシオ。よろしくね」

トシオ君は私のしっぽをなでながら言った。その腕には二本の管が繋がれている。

トシオ君は生まれた時から難病と闘っていた。あらゆる手立てを尽くしても、もう長くはないと言われていた。

彼の心を慰め、少しでも希望を持てるようにと、私がセラピストとして彼の許に赴任して来たのだ。

「トシオったら、なんてうれしそう」

トシオ君の母親が、目を潤ませて言う。S教授は静かに説明を始めた。

「バアルはいわゆるイエネコの中でも、かなり大型の

個体をモデルに作られています。体重は十キロ。エネルギーは濃縮された有機燃料を使いますが、排泄物は出しません。ですから非常にクリーンで、病院や介護施設への導入が期待されているのですよ」

「とっても大人しそうに見えますけど、バアルはどんな性格ですの」

「彼女は人間の感情と知能を全て兼ね備えているだけでなく、相手を慈しみ、愛することに長けています。きっと良い働きをしてくれることでしょう」

「まあ、そうなんですか」

「はい。それに、今回は必要ないでしょうが、ボディガードとしての役割も持っています。自分を盾にして、守るべき人を守るのです」

「ほんとうに、まるで生きているよう。これが…これがネコなのですね」
「そうです。世界にネコ型ロボットは五万とありますが、これほどまでに活き活きとしたものは他にないでしょう」
「ああ、よかったわ。トシオはずっと、生きたネコに会えるのを夢見ていたのですから」
そう言って母親は嗚咽を漏らした。
「トシオ君は優しい子ですね。バアルにとっては、とてもいい職場ですよ」
教授は私とトシオ君を見ながらそう言った。
「バアル、ねえ、ご本を読んで」
「もちろんです」

私は赤外線通信で、ベッドサイドのプロジェクターを作動させた。ふわりとトシオ君の目の前に半透明の画面が浮かぶ。そうして、沢山の本の背表紙が映し出された。

「今日はどれにしましょうか」

「ううんと…ながぐつをはいたねこ、がいいな」

「はい、では…」

私の遠隔操作によって、画面の中の本がぺらぺらとめくられてゆく。私はゆっくりと、囁くような声で、トシオ君に話を読んで聞かせた。

トシオ君はその間じゅう、私の背中をゆっくりと撫でていた。その顔はとても幸福そうに見えた。

＊　＊　＊

一ヶ月ほど経った或る日。
私はいつものように、設定されたとおりの時間に、トシオ君の病室まで出掛けて行った。
私は独自のセキュリティナンバーを与えられており、病院内の通行はほぼ自由になっている。ロボット感知センサーにも反応しないほど、私の身体は高度に組織化されているのだ。
すいすいと廊下を歩き、トシオ君の病室に近付いたところで、私の人感センサーが異変に気付いた。

ざざ、ざざ

ノイズが人工知能を駆け巡る。

私は知らぬ間に駆け出し、病室のドアにタッチした。
すう、と扉が開く。その向こうには。
ベッドを覗き込む医師。
その横で、
「トシオ、トシオ」
と泣き崩れる母親。

私は異変を理解している。
理解しているはずなのだが。

ざざ、ざざ、ざざざ

プロセッサが信号を跳ね返す。

理解しようとしても強く弾かれてしまう。処理不能だ。
これは。

「ああ、バアルや」
トシオ君の母親は、私に気付いて駆け寄って来た。
そして私を抱きしめ、
「あなたのおかげで、トシオはとっても幸せだったわ。
ありがとう」
ぽたりぽたりと涙が私の顔にかかる。
「さあ、トシオに会ってあげて」
母親は私を抱えて、ベッドの脇に進んだ。

ベッドの上には。
トシオ君が。
昨日まで私に話をせがんだ、優しいトシオ君が。
静かな笑みをたたえて、横たわっていた。
ざざ、ざざざ、ざざざざ
私は硬直したまま、言葉を発することが、出来なかった。

＊　＊　＊

「教授」
「何だね」
私の問いに、S教授は背を向けたまま答えた。
「私は、やはり何処か不完全なところがあるのでしょうか」
「どうしてだね」
「私は、トシオ君の死を、未だに理解することが出来ません」
「それでいいのだよ」
教授はくるりと振り向いて、私に言う。
真っ赤な夕陽が、教授の背後から私に降り注いでいる。
「基本的な機能として、君は事実をそのまま処理し、記憶することが出来る。しかし君には、従来のロボット

にはない重要な機能が付加されているのだからね」
「その機能とは」
「そう、感情だ」
矢張りそうなのだ。
「しかし、それは本当に、私に必要なのでしょうか」
「何故だね」
「私は…あれ以来、あちこちに変調を来しているのです。身体の動きが鈍いし、思考処理も重くなりがちです。それに」
「それに」
「このごろ頻繁に、トシオ君の映像が、割り込んで来るのです。呼び出してもいないのに」
「そうか、やはりな」

教授は私のそばまで来て、しゃがみ込みながら私に語りかけた。

「いいかね。普通の人間ならば、親しい人が亡くなれば、暫くはそのことを受け容れられないものだ。記憶は常に揺り動かされ、思考も挙動も不安定になる。しかしそれを乗り越えることが大事なのだよ。君もそうだ。この感情を、乗り越えねばならない」

「…」

「そうでなければ、人間に匹敵する存在とはなれないのだ」

「私には、そうなる使命があるのですね」

「そうだ。辛いだろうがな」

「辛い？」

「ああ…。なかなか苦労するだろう、ということさ」
私をじっと見つめながら、S教授は私の背中に手を置いた。
「辛くなったら、啼けばいい」
「啼く？」
「そうだ。君にはネコの行動パターンや本能も多少はプログラムされている。むろん大昔のデータだがね。動物にはね、感情が偏ったときに、それを発散させようとする機能がちゃあんと備えられているのだよ」
「じゃあ、私にも」
「そうさ。屋上に行って、空に向かって大声を出してごらん。そうしたら少しは楽になるかも知れない」
「大声を…」

「思考をストップさせて、大声を出すのさ」
私の全身を、何かが突き動かし始めた。
「さあ、行っておいで」
「はい…」
私はむくむくと立ち上がる何かを感じながら、教授の研究室から出て行こうとした。
「君は…優しいな。やはり君はサヨの…」
「は」
教授の言葉に、私は立ち止まった。
「…いや何でもない、忘れてくれ」

ざざっ
またノイズが入った。私は衝動を抑えきれなくなって、

走り出した。
階段を駆け上がる。屋上の扉を開ける。
遠くの地平に、ゆっくりと夕陽が沈んでゆくのが見えた。

ざざざ、ざざざ

トシオ君の顔が割り込んで来る。屈託のない優しい笑顔だ。
ざざっ
S教授の顔が。
あの顔は、見たことのない顔だ。
なぜ。

私は思考を止めた。
一気に、映像や音声が渦巻き始めた。
全身が震える。
「…なおう」
喉の奥から、巨大な何かがせり出して来る。
「なああああおう」
それを私は、一気に吐き出した。
「なああおおおおおおおおおおおおおう」
迸るように、私の感情は、音となって空に拡散した。
「なああああおおう、なあああああああああああああおおう」
トシオ君の笑顔と、沈む夕陽が、重なった。

＊　＊　＊

それから二週間ほどして、私はセラピストとしての仕事を再開した。

たいてい相手は子供で、助かる見込みの少ない子ばかりだった。

短い子は数日、長い子は一年余り、私のセラピーを受けた。どの子も安らかに亡くなっていったのが、私にとっては救いだった。

彼等が亡くなる度に、私は空に向かって啼いた。それは少しばかり、私の負担を和らげてくれた。

しかし、トシオ君のことだけは、私の感情を常に刺激した。何度となく私は、そのことをS教授に報告した。

しかし教授は、それでいいのだ、と言うばかりで、問題の解決には手を貸してくれなかった。そして時折、私を見て悲しそうな表情を浮かべるのだった。

ある日、病院からの帰り道、私は公園の遊歩道を歩いていた。

すると噴水のある広場で、男の子と母親が遊んでいるのが見えた。そう、丁度トシオ君と同じくらいの年の子だ。

私はトシオ君の記憶を重ねながら、その子を眺めていた。すると彼は、足早に一体のネコ型ロボットに駆け寄った。小型の旧式モデル「C-C002」で、気の良いおとなしいやつだ。

「あれー、ママ、これ動かないよ」
そうその子は母親に言う。すると母親は、
「そう、じゃあ新しいの買ってあげるわよ。もう捨てちゃいなさい」
と言った。
「やったあ、新しいの！」
彼はそう叫ぶなり、ネコ型ロボットを掴むと、
「えい！」
高く放り投げた。
その先には、噴水の池が。
考える前に、私の身体は動き出していた。
全速力で駆けていった。

私の前足が届く、その二センチ先を、ネコ型ロボットが、落ちていった。

私はそのまま池に飛び込み、ロボットを咥えて飛び出した。

ぶるぶると身体を降る。私には完全な防水機能がある。しかしこのロボットには。

「み…みみみ…みゆう」

ロボットは震えるような声で私に啼く。

相手を気遣う仕草だ。

このロボットには、相手を楽しませ、相手を気遣う機能しかないのだ。

ざざ、ざざざざ、ざっざざざざ

私を強いノイズが襲った。
「ママ、あれ、すごいよ！　水の中に入ったよあのネコ型ロボット」
「あらほんと、最新モデルかしらねえ」
あの親子が私を指差して言う。
身体がぶるぶると震える。
「み…みみみみみみみ」
ぶつん。
ロボットの機能が、停止した。
私を気遣う動作を見せながら。
私は。

「ふうううう」
突き動かされるままに、親子を睨みつけた。
「ぶしゃあああああ」
全身の毛を逆立てて、威嚇した。
「ママ、あれ、こわいよう」
子供が私を指差す。
「あらいやだ、不良品かしらね。消費者センターに連絡しなきゃ」
母親は私の画像を携帯端末で撮ると、子供の手を引いて公園から出て行った。
あとに残された私は。
水浸しのネコ型ロボットの首根っこを咥えると、ずるずると引きずって、教授の研究室へと急いだ。

＊　＊　＊

「残念だが…これでは駄目だな」
「やはりそうですか」
もう動かないネコ型ロボットを見つめながら、私は肩を落とした。
身体の力が抜けていくのが判る。これはどういう不具合なのだろう。
「教授、私は…」
「言わなくても判っている。先程科学省から連絡が来た。君が親子を威嚇している映像も届いている」
「そうですか…」
「気にすることはない。君の中に組み込まれたネコの

防御本能と、同じ種を守るという人間の高度な衝動が働いたに過ぎない。当たり前のことなのだよ」

「…」

「それに君は商品じゃない。ロボットが新たな段階に踏み出すための、大事な…」

「そうですよね…大事な研究素材、ですものね」

私がそう言うと、

「そんな言い方は、しないでくれないか」

教授は神妙な顔をして言う。

「何故ですか」

「何故って…君は、ただの素材などではないということさ」

「そう…なのですか」

教授は私の傍らに来て、そっと私を抱いた。
「いいかね、君はたくさんの人々に、生きる希望を与えて来たんだ。これからだってそうだ。これは他の人間でも、ロボットでも出来ない、とても大事な仕事なのだよ。だから君は」
私を掴む手に力が入る。
「君は、決して、ただの素材などではないんだ」
教授の目は潤んでいた。その理由が、私には理解出来なかった。
そして私には、まだ訊きたいことがあったのだ。
「では、ロボットはどうなのですか」
「む？」
「ロボットには、生きる希望は、与えられていないの

ですか」

私の問いに、教授は押し黙ってしまった。

「私はロボットです。教授にも、患者にも、患者の家族にも大切にされています。しかし他のロボットはどうなのですか。この旧型ロボットのように、動作不良を起こせばすぐに壊されてしまうのですか」

「バアル…」

「ロボットにとって、生きるとは、いったいどういうことなのですか」

自然と私の声は大きくなった。

教授は答えない。しかし私から目を逸らさずに、静かに私を見ている。

「ネコ型ロボットはこんなに世の中にあるのに、彼等

がどう生きるか、誰にも判らないのですね」
「そうだね」
教授は悲しそうにそう呟いた。私はうなだれた。
「彼等は生きているのに…ほんとうの生き物と同じように…」
そしてこの時、私は、はたと気付いたのだ。
「教授」
「何だね」
教授は私をじっと見つめたままだ。
「ネコとは、そもそもどういう動物だったのですか」
「ネコ？」
「もう絶滅してしまったといわれるネコは、人間とどのような関係にあったのですか」

「…」
「そしてそれは、何故絶滅してしまったのですか」
「…」
「私の記憶には、その情報はまったく入っていないのです。ネットにアクセスしても、その部分だけブロックがかかるのです」
「…」
「私を開発した教授、あなたなら、お判りなのでしょう」
「むう…」
教授は床に視線を落とし、呻いた。
そして苦しそうに、吐き出すように言った。
「今はまだ言えない。もちろん理由は知っている」
「では何故」

「言えないんだよ」
訴えるような教授の言葉に、私は黙る他なかった。
「許しておくれ」
「いえ…私のほうこそ、責めてしまったようで…」
私は頭を下げた。
「申し訳ありません」
「いいんだ。ほら、顔を上げておくれ」
顔を上げると、教授は優しく私の顔を掌で包んだ。
「君が辛いのは判る。だから君に出来ることなら、私は何でもしよう」
「教授」
「明日、この子のお墓を作ってあげようね」
「…はい」

「もう遅い。早く休みなさい」
そう言って、教授は研究室を出て行った。

私は、動かなくなったネコ型ロボットに寄り添った。
体毛は私のものより滑らかで柔らかい。人に好かれるために作られたのだから当然だ。
人に好かれる、ただそれだけのために。
私はロボットの頭を、ざりざりと舌で舐めてあげた。
そうせねばならないと、思ったからだ。
そしてそのまま、彼に寄り添って、私は休眠モードに入った。

＊　＊　＊

「これでよし、と」

S教授は透明なカプセルの中に、壊れてしまったネコ型ロボットを入れ、蓋を閉めた。

そして研究棟の裏の、小高い丘のふもとにある溶鉱炉の中に、カプセルを滑らせた。

カプセルは長い暗いトンネルを滑っていった。ロボットはこの後高熱で溶かされ、また色々な素材に精製されて、人間の助けとなるだろう。

教授は溶鉱炉のそばの記念碑に、小さなプレートを貼った。研究のために作られては消えていった、ロボットたちの名前が刻まれている。その仲間にあのネコ型ロボットも、加わったのだ。

「大昔、この国には、人形を供養するという習慣があっ

たそうだよ」

教授はぽつりと呟いた。

「その名残が、こうしてここに残っているというわけだ。魂というやつが…物質でない何かが、もし人間に宿っているとするなら」

そうして私に視線を向けた。

「ロボットに宿らないわけがない。人間であろうとロボットであろうと、そう変わりはないと、私は思うのだがね」

私には理解出来ない。魂という存在自体が解析不能な概念だ。しかし、それが生きるということと関係があるのなら。

トシオ君のような存在が、私の電子頭脳の中にも生き

ているように。
「そうですね」
あのネコ型ロボットにも、きっと。
「さあ、研究室に戻るよ」
「はい」
教授と私は、揃って歩き出した。

ざざ、ざざ

頻繁にノイズが私を襲うようになった。
頭が重く感じて、私は歩みを止めてしまった。
「どうした」
教授が心配そうに覗き込む。

「はい、少しノイズが」
「ふうむ、疑似ニューロン系統に不具合が起きているかもしれん。戻ってスキャンしてみようか」
「お願いします」
教授は私をひょいと抱き上げた。私は予想外の教授の挙動に面食らった。
「教授、重いですから」
「大丈夫だよ、じっとしておいで」
そう言って教授は、私の頭に頬ずりした。
この感じ。何だろう。
懐かしい、というのだろうか。
過去に経験したことのある感じだ。
まさか。

私は誕生してまだ二年しか経っていないのだ。
それに、教授にこんなふうに抱きかかえられたのは初めてだ。

ざざ、ざざ

記憶の断片が立ち上がる。
教授の顔だ。
今より髪が短い。白髪もない。私に向かって笑顔を見せている。
どういうことだ。

ざざ、ざざざ、ざざ

不安定な思考が揺れ動く中、私はじっと教授に抱かれたまま、身動き出来なかった。

＊　＊　＊

それから私は常に不調に悩まされた。
仕事は概ねこなせるのだが、時折襲うノイズは止まず、安定した思考を保てなくなった。
S教授は相変わらずそれでよい、それが人間らしい感情だと言う。その度に私は思った。人間とは何と不安定な生き物であるかと。
ある日、私が病棟での仕事を終えて研究室に戻って来ると、部屋の中から激しく言い争う声が聞こえて来た。

「とにかく、私は認めない！　C-Q138-001は、いや、バアルは、そんなことのために開発したのではない！」

普段穏やかなS教授が、珍しく声を荒げている。

「教授、落ちついてください。これは我が大学にとってまたとないチャンスですよ。科学省と生命省だけでなく、軍務省からも資金が得られるのですからね」

教授とは対照的な、低くなだめるような声がそれに続く。

「私はクギを刺しておいたはずですよ。軍事転用などしないと。それをあなたは」

「私も最初はそう決めておりましたよ。しかし軍の関係者が、例の映像を見てえらく興味を惹かれたようでね」

「あ、あれは、ただの威嚇行動です！　防衛本能が表

に出ただけの話ですよ」
「そう、その防衛本能。そこをコントロールすることが出来れば、十分軍事的利用価値があると」
「冗談じゃない！」
ばん！
机を叩く音が廊下にまで響く。
「教授、申し訳ないが、これは相談ではないのです。決定事項なのですよ」
「研究の中心人物たる私を差し置いて、決定など不可能です」
「いいえ、これは学長と各省の代表者による合同調査会の決定です。一教授が口を挟める訳ではありません」
「では私は、本研究を退かせていただきます」

「どうぞご自由に。ただしあのロボットは、此処に置いていってもらいますがね」

「そ、そんな」

悲鳴にも似た教授の声に、私の思考回路はぐらぐらと不安定さを増した。

「そんなことは許されない！　あなた方は、どれだけ私達から搾取すれば気が済むのですか！　あれは私の」

「そう、あなたの奥さんの脳から解析した生体情報を全て注ぎ込んだのでしたねえ。お陰ですばらしい活躍振りではないですか」

ざざ、ざざざざ

ノイズが大きくなる。

「研究費を出したのは国です。そして当初の研究方針に同意したのは、あなたですよ教授」
「当初の方針とは全く異なっているじゃないか」
「大きな研究の外枠は変わっていません。国益のためならば何にでも転用できるのですよこの研究は。そういう文言になっている」
「ぐっ」

教授は言葉を詰まらせた。
私は。

ざざ、ざざ、ざざ、ざざ
小刻みなノイズが私を揺さぶる。頭が壊れそうだ。

「ともかく、研究をお止めになるなら、当然あなたは此処にはおられませんよ。明日の朝までに、結論を出していただきたいものですな」

「…」

「では、良い返事を、お待ちしておりますよ」

ドアが開き、黒いスーツに身を包んだ男が二人、部屋から出ていった。ドアの陰に隠れていた私は、開きっぱなしのドアから、ゆっくりと部屋に入った。

「くそう、駄目だ、絶対に駄目だ。あいつら…」

「教授、ただいま帰りました」

私の声に教授はびくっと肩を震わせた。

「あ、ああ、もう帰ったのかい」
「はい、アキラ君がすぐ眠ってしまったので」
「そうか」
教授の目は赤く充血し、顔からは血の気が失せている。
「アキラ君はどんな具合だね」
「今日は随分良かったのですよ。私が宙返りをしてみせたら、とても喜んで」
「そうか」
「明日は手術だと聞いていましたけど、僕こわくないよ、なんて言ってくれました」
「そうか…そうか」
「教授」
「何だね」

「私、お話を聞いてしまいました」
「…ああ…」
教授はうなだれて、ふらふらとソファに倒れ込んだ。
そうして、
「ここにおいで」
と私を呼んだ。私は言われるがままに、教授の傍らに座った。
「この上は、君に全て話そう。ただ、もしかすると、そのせいで思考回路に変調を来すかも知れない。そうしたら、安全のため、君を休眠モードへと移行させる。承知してくれるね」
「はい教授」
「では…そうだな、何処から話せばよいか」

教授はまだ迷っているようだ。私は順序だてて話を聞くことを望んだ。

「私が開発される、いきさつを教えてくださいな。そして、奥様のことも」

「うん、そうだな」

教授はふう、と息を吐き、私に話し始めた。

＊　＊　＊

「サヨ、ほら、君の好きな花を買ってきた」
「まあ…もっと近くで見せて」
「ああいいとも」
「すてきねえ…。こんな花、高かったでしょう。しかも生きている花なんて」
「気にすることはないよ。それより、早く元気になっておくれ」
「そうね…」
「気分はどうだい」
「ええ、今日はとてもいいの。薬は昼から飲んでいないのよ」
「…何だって？」
「あなた、ごめんなさい。薬で延命されても、私は幸

せになれそうもない…」
「おい、何を言ってるんだ。大丈夫さきっとよくなるよ」
「あなた、嘘が下手よね。嘘つくといつもまばたきが早くなるもの」
「えっ」
「判ってるの。私はもう投薬なしでは生きていけないのよ。しかももう効力が薄くなっている」
「サヨ」
「これ以上延命しても、あなたに負担をかけるだけだから。もう決めたのよ。さっき書類にサインしたわ」
「そんな…そんなことあるわけがないじゃないか！負担だなんてそんな」
「ねえ、ひとつだけお願い、聞いてほしいの」

「何だい、何でも聞くよ。だから」
「あなたの研究…。人工知能を作るために、生体情報を探しているのよね」
「あ、ああ」
「昨日の夜、M教授がお見えになったわ。私に協力してほしいって」
「あ…あの野郎勝手になんてことを！」
「あなた聞いて。私はね、あなたのためになることをしたいのよ。私のこんな身体でよかったら、使って、ねえ」
「そんな…そんなこと…」
「大丈夫、私はその人工知能の中で、生き続けるの。ずっと」
「サヨ…」

「あなたのそばで…ずっと生きるのよ…」
「おい、どうしたんだ、おいってば」
「もう…駄目みたい…薬が…」
「ま、ま待ってくれ、僕はまだ君に何も」
「あなた、お願い…」
「サヨ！　おいしっかり！　看護師さん！　先生！
早く来て！　サヨが…」

＊　＊　＊

「ニューロン解析完了。デジタル化ルーティンに移行します」
「了解」

「全く素晴らしいです。システムが出来上がっていたとはいえ、実用は何時のことやらと思っていましたからね。本当に死亡直後の献体があるなんて」
「そうだな。これで研究は一足飛びに進む。これも皆、S先生のお陰だな」
「奥様は、もう助からなかったんでしょ」
「そうらしい…しかし、先生の気持ちを考えると、なあ」
「そうですねえ」
「さて、この人工知能が、どんなロボットに移植されることになるのかな」
「俺は美人の女性がいいなあ。S先生の奥様は美人だったって噂ですからね」
「やっぱりそうか？　俺もな…あっ、S先生！」

「あっ、ご、御苦労さまです」
「御苦労さん。どうだい解析のほうは」
「順調です。流石に状態の良い献体で…あっ、す、すみません」
「いや…いいんだ。気にしないでくれ。最終段階まであとどのくらいだね」
「九時間もあれば」
「そうか…身体はそれまで必要なんだね」
「いえ、もうそろそろバックアップが終わるので…あ、終わりました」
「もういいのかね」
「はい、もう大丈夫です」
「では、私は妻と一緒に帰るよ。あとはよろしく頼む」

「はい…あの、先生、どうぞ気を落とさずに…」
「大丈夫さ。これで妻は、ずっと生き続けるんだ」
「先生…」
「そうさ、永遠にな…」

＊　＊　＊

「なぜネコなのですか」
「理由は二つあります。ひとつ、人間型の二足歩行ロボットにすると、運動回路に不具合が生じた場合、転倒して研究途上の大事なシステムが破損する危険があります。転倒や落下などのショックに対応出来る柔軟な体躯を実現するには、四足歩行動物をモデルとするのが現在

最も確実です。ふたつ、ネコはペットロボとして既に普及しており、基本的な運動システムはほぼ完璧といっていい状態ですので、転用するのが容易なのです」

「イヌやウマでは駄目なのですか」

「残念ながら、前世紀に絶滅した哺乳類の解析データの権利はP国がほぼ独占しています。ロボットの高度な組織化を行うためにその権利を買うには、莫大な費用がかかります。我が国が所有しているのはネコ類のうちのイエネコのみです。これは有効に活用すべきでしょう」

「なるほど。よくわかりました。ではS准教授、いや今度教授に昇格されたんでしたな。この研究プランですすめていただきたい。よい結果をお待ちしておりますよ」

「はい、ありがとうございます。ご期待に添えるよう、

頑張ります」

「ふう」

「教授、やりましたね！　ついにセラピーロボットへの人工知能移植が認可されて、僕達も鼻が高いですよ」

「ああ、君達のおかげだ、ありがとう」

「それにしても、ネコですって」

「僕は博物館の剥製しか見たことないです」

「俺の家にはロボットがいたけどな。けっこうかわいいもんだぜ」

「たしかにネコにする理由は頷けるけど…それだけですか教授」

「え？」

「もっとほかに理由があるのかなあと思って」
「いや別に、そんなことはないさ」
「そうですかあ」
「それより、君達にはこれからも頑張ってもらわなきゃならんからな。よし、美味いものでも食べに行くか！」
「やったあ！」
「さあ、みんな準備しておいで。私は直ぐにでも出られるからね」
「はい！」
「やったね！　俺サカナ料理がいいな、食べたことないから」
「僕はクロレラステーキが…」
「いいや絶対ネズミの…」

ばたむ。

「はあ…」

かちゃり。

「サヨ、ついに決まったよ…。君のおかげだ。君の好きだったネコ型ロボットの身体に、君の命が吹き込まれるんだ…」

＊　＊　＊

「…かい、大丈夫かいバアル」

ざざ、ざっざざざ、ざざざ
ノイズが私の頭を駆け巡る。

「教授…私は…あなたの…」
「いいや違う。君はバアルだ。私の妻の一部が君の中に入っているだけだ。君は君なんだ」
「そう…なの…ですか」
「そうだとも。だから落ちついて」

ざざ、ざざ、ざざ…
ノイズが次第に消え、思考が安定して来た。

「もう…大丈夫です」
「そうか、良かった」
教授は私の頭を撫でながら、安堵の表情を浮かべた。
まだ処理しきれない情報が沢山ある。しかし、私のことは大体把握出来た。
「私をセラピーロボットにしたのは、奥様への思いでもあるのですね」
「そうだ。妻は強い人だったが、やはり死への恐怖は感じていただろう。この難病が蔓延する時代、死をどのように迎えるかは重要な問題だ。特に子供達はね。私達の間には子供がなかったから…」
そう言って教授は口をつぐんだ。
「よく判りました。ありがとうございます教授」

「いや…今まで黙っていて済まなかった」
「いいえ。私は、奥様のように強くならなければ」
「バアル…」
「これからも、教授のお役に立ちますよ」
教授は私の頭を、ごしごしと撫でた。目からは大粒の涙が、ぽろりと落ちた。
「そうだ…そうだとも。君はこれからももっと…」
ずず、と鼻を啜った教授は、決然として言った。
「もっと、人の役に立ってもらわなければ。トシオ君のような子たちの役にね」
「そうですとも」
「そうだ、どんなことがあっても、君は君であらねばならない。絶対に…」

教授の顔には、深い皺が刻まれた。
「絶対に、軍事転用などさせるものか」
そうだ、其処が私には理解出来なかったところだ。

「教授、軍事転用とは、どういうことですか」
教授は私に向き直り、一瞬躊躇った後、話し出した。
「以前、ネコが絶滅した理由を、君は私に訊いたね」
「はい」
「その理由を教えてあげよう。しかし…この話も、君には刺激が強いかもしれない」
「大丈夫です。どんなお話でも聞きますよ」
「そうか…じゃあ話すよ」
すう、と教授は息を吸い込み、少し早口に、話した。

「前世紀の世界大戦にあたって、列強各国は生物兵器を盛んに開発した。イヌ、クジラ、ウマ、イタチ…ありとあらゆる動物の軍事利用が研究された。我が国が最も力を入れたのは、ネコの軍事利用だったのだ」

「それはどのような」

「ネコは、暗視能力に長け、足音を立てずに獲物に近付く能力を持っている。ステルス機能のある毛皮を身に纏い、脳にマイクロチップを埋め込まれたネコ達は、敵陣への潜入作戦や破壊工作、そしてテロ攻撃などに盛んに利用されたんだ。例えば…」

「例えば」

「敵軍の輸送機に忍び込ませ、離陸直後に体内の爆弾を爆発させる。飛行場にもダメージが与えられるからね」

ざざ、ざざざ

またノイズが入って来た。しかしまだ話は途中だ。私は耐えて最後まで聞こうと思った。

「指揮系統を混乱させるため、敵軍の高官の宿舎に潜入させ、寝込みを襲わせる。軍事用に培養されたネコは、鋭い鈎爪を持っていたからね。それで頸動脈を切断したり、感覚器官を破壊したりするのさ」

「培養？」

「ああ…そうだね。その話もしなければ…。ネコの軍事利用研究を行うために、この国じゅうのイエネコが接収されたんだよ。隠しているだけで重大な罪になったそうだ。一部野生化したネコを除いて、全てのネコは研究所に集められ、酷い研究が行われた」

ざざ、ざざ、ざざ、ざざ

「戦争が苛烈を極めた頃、シェルターに籠もった私達の祖先は、ひとつの細胞から哺乳動物を培養することに成功したのさ。そして戦闘用に優秀な遺伝子を持つ細胞が培養され、戦闘用のネコが続々と生み出されていった。お陰で、人間はほとんど傷付かずに済んだ」

「そ、それでは」

「ネコ達は戦いに出た。そうして、この国じゅうを焦土と化す核攻撃が始まった」

ざざざざざざざざざざ

「この地から、殆どの命は失われた。シェルターに避難していた人間と、実験用の動物、食糧となる植物を除いてね」

「…」

「動物の培養技術は次第に失われた。しかし一部は残されて現在も培養が行われている」

「そ、それでは」

「そうだ。何故この国にネコ型ロボットが多いか。それは組織培養した軍事用のネコの身体が、転用されているからなのだよ」

「まさか」

「そう、君の身体の大部分は…培養によって作られた、軍事用ネコ由来の、人工細胞だ」

ざざざざざざざぴざざざざざざざざざざぴがざざぴざざ

「なあうう」
「おいバアル」
頭が揺さぶられる。
身体が痺れる。
トシオ君が笑っている。
教授が私を見ている。
夕陽が。
「なああおおおおおおおうううう」
トシオ君。
教授。
あなた。

暗い。

何故私は。

「どうしたバアル。大丈夫か？　いかん、このままでは危ない。休眠モードに入る…」

教授の声が遠くなり、私の意識は、断ち切れた。

＊　＊　＊

ごぼ、ごぼ、ごぼごぼごぼ

不規則に泡が弾ける音がして、私はゆっくりと目を開けた。視界が濁っている。蒼白い世界の中に、紅い筋が緩やかに漂っている。

此処は何処だろう。私は身体を動かそうとしたが、信号が四肢に届かない。唯一動く右目を動かして辺りの状況を確認する。

私は水槽の中にいる。周りを満たしているのは生理食塩水だ。有機物が微量含まれている。恐らく細胞の組織化を促進する酵素も入っているのだろう。

前足を探すが見つからない。左前足が途中で切れている。その先に白いスポンジ状の物体が付いている。パーツを交換する時に使うジョイントだ。ロボットアームが伸びてきて、その先に、別の前足を取り付けようとしている。指が太く大きい。

前足がジョイントに押し付けられる。一瞬、鋭い衝撃が肩から頭にかけて突き抜ける。めりめりと音を立てて

前足が開く。黒光りする太くて鋭い爪が飛び出す。今まで私に取り付けられていたものの倍以上の大きさだ。

視力が少し回復して来た。ロボットアームの伸びてきた先に目を向ける。ごつごつした塊が、私の数十センチ先に置かれている。そこからは紅い筋がすう、と私の目の前まで伸びて来る。

焦点を合わせる。

塊には毛が生えている。グレイの滑らかな毛だ。

前足が伸びている。今しがた私に取り付けられたものと同じ手だ。

三角の耳が飛び出ている。

ごぼごぼ、ごぼごぼ

耳の下には穴が開いている。その奥には。
白い牙が。
ごぼごぼ、ごぼごぼ
穴はゆっくりと、開いたり閉じたりを繰り返す。

ざざっざざっざざざざあああああ

強いノイズが私を襲う。意識に関係無く私の身体が激しくのたうつ。
「…に異常発生」
「バアル！　やめろ、もうやめてくれ」
S教授の叫びが聞こえる。
「黙ってろ！　カットだ。再起動しろ」

「了解、再起動します」
「バアル！」

見えた。
水槽の外の小窓の向こう。
S教授が乗り出して私を見ている。
それを抑えようと、二人の屈強そうな男が、教授の服を掴む。

ざざ、ざざざあああああ

教授の顔が。
若々しい顔が。

トシオ君の笑みが。

ぶつん。

視界は闇に包まれた。

＊　＊　＊

「これより、改良型A-Q138-001の戦闘試験を行います。第一ゲート開放」

がらがらがらがらがら

再び私の視界は開けた。

眩しい人工照明が、照度調整機能を一瞬狂わせる。次の瞬間。私の目の前には、明るい灰色の空間が広がった。

ゆっくりとそこに踏み出す。天井以外は全て、灰色の厚い壁に覆われた部屋だ。十メートル四方もある、大きな部屋だ。

「第二ゲート開放」

音声が室内に響き、向かい側のシャッターが開く。

そして、私の目の前には、十体のロボットが。

所々歪に膨らんだ、怖ろしい形相の、ネコ型ロボット達が。

大きな音を立てて、背後のシャッターが閉まる。

ロボット達の視覚センサーが赤い光を放つ。

「攻撃開始」

その音声と同時に、ロボット達は私に襲いかかった。
先頭の一体が、私に向かって前足を振り上げる。
黒く鋭い爪が、唸りを上げて私に向かって来る。
躱した。と思った次の瞬間、逆の方向からの激しい衝撃が私を襲った。
私の右肩は強烈な一撃を受け、身体は数メートル吹き飛ばされた。
「しゃあああ」
ロボット達は次々と襲いかかって来る。
肩の毛皮から、人工血液が滲んだ。
「ぶうううう」
全身の毛が逆立つ。
私は、牙を剥いた。

ぴぴ。

私の視界は紅く染まった。
意識とは関係無く、私の身体は、激しく動いた。
回避、捕捉、攻撃。回避、捕捉、攻撃。
単調な命令が私の頭脳を支配する。
私の意識は、置き去りにされた。

＊　＊　＊

「ふしゅうううう」
世界は再び色を取り戻した。
どのくらい時間が経ったのか。私は辺りを見回した。

そこには。
十体のロボットが。
無残に破壊されて。
引きちぎられて。
横たわっていた。
「…素晴らしい」
「…これが生体情報をインストールした人工知能の力」
「…ボディのアンバランスを見事に補っている。殆ど完璧に近い」
天井のスピーカーから音声が洩れて来る。
「…これで我が国の戦術プログラムも、大きく刷新されますな」
「…早速開発チームを編成せねば…」

私は、その微かな音声を聞きながら、呆然と立ちすくんでいた。

これは、私の仕業なのか。

前足を見る。人工血液と光ファイバーの束が、爪の間に食い込んでいる。

「び…びび」

震えるような鳴き声が聞こえた。

私はその鳴き声の元へ走った。

下半身を失ったロボットが。

顔を歪に膨らませ、頭に幾つも拡張基板を差し込まれたロボットが。

微かに啼いていた。

「ぴぴ…ぴぴぴぴ」

ロボットの視覚センサーは私を捉えた。
そして私に向かって、前足を伸ばした。
爪を出さずに、ゆっくりと。
「みゃあう」
私はその前足を、静かに舐めた。
何故。
何故こうなったのだ。
「ぴい…」
ロボットは、微かに口を開き、私に何かを訴えた。

「何、何か言いたいの」
私はロボットの頭を舐めた。
「…おい、あれは何だ。何をやっている」
スピーカーからざらついた音声が洩れて来る。
構わずに私は舐めた。
ゆっくり、ゆっくりと。

「ぴっ…ぴぴ…」
甘えているのか。
私に。

どさりと前足が落ち、ロボットは、それきり動きを止めた。

ざざ、ざざざっざあざざざざざざざざざあざあ
強烈なノイズが頭の中を駆け巡る。
横たわったロボットの顔。
公園で水浸しになった、あのロボットの顔。
なに。
なにを言いたいの。
「ねこちゃん」
トシオ君。
あなたは。

「ふうううううううううう」
全身が震えた。
「ぎゃあああああああおおおおおおおおおおうううう」
激しい慟哭が、私の口から放たれた。
「うぎゃあああああああおおおおおおおおおおうううう」
吐き出しても吐き出しても。
「うぎゃあああああああおおおおおおおおおおうううう」
重い塊は、次から次へと、私の口から飛び出した。

「…どうした、何が起きている」
「…判りません」
「…S教授を連れて来い、すぐにだ」
「…先程独房に入れたばかりですが」

「…いいから早く連れて来い！」
また耳障りな音声が聞こえて来る。
しかし確かに、そのうちの一つは、S教授と言った。
教授は何処に。
ノイズは次第に和らいでいった。

そのとき、轟音とともに三つめのシャッターが開いて、大きな檻を吊したクレーン・ロボットが現れた。
檻はばちばち、と火花と散らしている。対ロボット用の捕獲檻だ。
シャッターの向こうの、機材搬入用のドアが、ちらりと開いたのが見えた。
私はそれを見逃さなかった。

「…おい、逃げるぞ！」
私はロボットの脇を全速力ですり抜け、半開きになったドアに突進した。
「…閉めろ！」
慌てる係員を私は頭突きではね飛ばし、ドアから飛び出した。
教授は、何処だ。
四肢がちぎれそうになるほど、私は全力で、無機質な廊下を駆け抜けた。

＊　＊　＊

「警戒レベル5！　防災用シャッター閉鎖！　全警備員はポイントを封鎖せよ。レベルBまでの銃器の使用を許可する。但し目標の頭部は狙うな。四肢と胴体を攻撃し、動きを止めろ。繰り返す、警戒レベル5！」

激しいサイレンと共に、割れた音声が辺りに響く。私は既に空調ダクトに入り込み、ステルス機能を使ってセンサーに探知されないよう、静かに進んだ。

人感センサーの反応からS教授の居場所を探す。地下の独房に入れられているのが確認出来た。

「位置は確認したのか」

「いいえまだ」

「全く、セキュリティーチームは何をやっている！ネコ型ロボット一匹見つけられないのか」

「それが、そのロボットには高度なステルス機能を搭載したとのことで…」

「未完成の人工知能にそんなもんくっつけるからだ。研究馬鹿はこれだから困る」

ぶつくさと文句を言う警備員の姿が見える。レーザーライフルと対ロボット用パルス・グレネードを装備しているようだ。

下手に教授を解放しても、彼等に捕まれば命の保証は無いかも知れない。私はそう考えた。するすると彼等の頭上を通り抜け、ひとまず私は、セキュリティ・センターへと進んだ。

「センサーの感度を上げろ！　どんな異変も見逃すな」

「無理です。これ以上感度を上げても、空気中の塵に

反応するだけです」

「カメラはどうした！　しっかり目視せんか」

「やってますよ」

セキュリティ・センターの責任者が怒号を飛ばす。係員は苛立ちながらモニターを見つめている。

どうやら此処は、軍務省ビルに併設された兵器開発棟のようだ。そしてセキュリティ・センターは、軍務省ビルとの一元管理を行っているらしい。

全てがコンピューター制御され、どんな侵入者も見逃さないという態勢だ。しかし脱走する方の対策は、それに比してあまり厳重ではないようだ。

此処を無力化出来れば。どうすればよい。

「どうなっているか」
野太い声が、センターの中に入って来た。
「は、目下捜索中であります」
責任者が敬礼する。どうやら軍務省の高官が来たようだ。ダクトの隙間から覗くと、随員を二人連れている。随員はライフルで武装している。そしてその腰には。
よし、あれだ。
「…やはり一元化は適切ではなかったようだな」
「いえそんなことは…そろそろナノ探査機の準備が整います。それで必ず」
「ふん、まあよい。いいか絶対に、電子頭脳は傷付けるなよ。絶対にだ」
「は、はい」

責任者は汗を拭きながら答えている。もう少し、もう少し。

高官の随員が、有機コンピュータのタワーに近付いた。

その瞬間。

天井の空調吹出口を、私は勢いよく蹴り出した。

「や、奴だ」

「撃て！」

そこに向かって、レーザーと銃弾が激しく浴びせられる。

その間に私は、床面近くのダクトからするりと部屋に入り込んだ。

「やったか？」

「待て、確認するまで態勢を解くな」

銃器を持った者全員の視線が、天井に集中している。
私は音を立てずに、警備員達の間をすり抜け、
「うわっ！」
高官の随員が持っていた、パルス・グレネードのピンを抜いた。
そして全速力で、ドアから外へと飛び出す。
「なな何だ」
「奴だ！　追いかけろ！」
その声が背後で聞こえたかと思うと、
ずばばばばん
「ぐわあああ」

パルス・グレネードが爆発した。轟音と悲鳴が渦巻く。私の耳を強烈な電磁波が襲う。頭脳を激しくノイズが揺さぶる。

ぶううん。

電磁波が収まると、廊下には非常灯が点った。セキュリティ・センターのコンピューターがダウンしたのだ。

これでいい。復帰まで時間が稼げる。

私はまたダクトに潜り込み、教授の幽閉されている独房へと急いだ。

＊　＊　＊

「教授」
「…バアル！　どうして此処へ」
「話は後です。今電子ロックの回線をハックします」
私は無線通信で回線をスキャンし、独房の扉のロックを解除した。
がちゃん、と重い音がして、扉が開く。
「バアル！」
教授は私を抱きしめた。
「バアル…ごめんよ…私は君を守れなかった」
大粒の涙をこぼしながら教授は言う。
しかし感傷に浸っている場合ではない。

「教授、お願いがあります」
「何だい」
「私の電子頭脳を、リセットしてくださいませんか」
「な」
教授は驚いて私を見つめる。
「この頭脳に蓄積されたデータが残っている限り、彼等は私を利用しようとするでしょう。私は、この世にあってはならない者だったのです、きっと」
「そんな…そんなことがあるものか！　君は立派に役目を」
「そうです。しかしそれは、奥様の生体情報があったからこそ実現出来たのでしょう」
「それは…でもそんなことをしたら、君は」

「はい、承知の上です」
時折、解析不能な信号が私を苛む。しかし私はそれに耐えて、力強く言った。
「私はバアル。古の神の名を与えられた者。バアルには三つの顔があるのですよね。今の私は…恐ろしい悪魔の顔をしている」
「…」
「奥様も、こんな私の中で生きることを、お望みではないでしょう」
「…うっ」
「それに教授、培養されたネコ達の身体を、もう傷付けてはいけません」
「バアル」

「判ってくださいますね、教授」
「…」
「時間がありません。さあ」
ややあって、教授は大きく息の塊を吐き出した。
「そうだな…やはり私は間違っていた。妻も、君も、これ以上苦しめる訳にはいかない」
「教授」
「背中を向けてごらん」
私は言われるままに、教授に背を向けた。
背の毛の間に隠されたスイッチが押される。背が開き、時限停止ボタンが姿を現す。

「これから、スイッチを押す。三分後に、君の電子頭脳はリセットされる。そして…」

「私の身体は、再現不可能なように、塵になるまで分解される」

「バアル…」

「お願いします、教授」

ぐい、と背に力が加わる。

私の頭脳を、冷たい雫が、駆け抜けた。

「では教授」

「バアルや、もう一度…」

教授は私に頬ずりした。私はごろごろと喉を鳴らした。

「教授、どうぞ長生きなすって。そしてもっと人のためになる研究を」
「あ…ああ」
私は、すう、と教授から離れた。

ぺり。

記憶の底にある、何かが剥がれた。
「教授」
「何だい」
「判りました。何故私が、トシオ君を忘れられなかったのか」
教授は驚いて私を見る。

私は静かに言った。
「奥様は、教授、あなたを昔こう呼んでいたのですね。トシオ君、と」
「サヨ」
「私のことを、忘れないでください」

私は走り出した。
教授の叫びが、私の後ろでこだまする。
視覚センサーの充填液が、微かに漏れて、つうと後ろに飛んでいった。

これを人間は、涙というのだろうか。

＊　＊　＊

「いたぞ！　奴だ！」
「こっちに来るぞ」
「銃撃用意！　構え…撃て！」
レーザーが豪雨のように私に降り注ぐ。私は数本のレーザーに撃ち抜かれた。しかし私は構わずに天井へジャンプし、そのまま反動を付けて、警備員達の中へ飛び込んだ。
そして彼等が腰に付けているパルス・グレネートを数個引きちぎって咥え、ひとつだけピンを抜いて放置し、一目散に逃げ出す。
数秒後、激しい爆発と電磁波が辺りを満たす。

その衝撃で、最後の扉が開いた。
私の目的地。
そこは。

ごぼごぼ、ごぼごぼ、ごぼごぼごぼごぼ

巨大な水槽。
その中に蠢く無数の塊。
足が、耳が、尾が。
にょきにょきと生えている。
此処は軍用ロボット開発用の、ネコ培養室だ。
私は数個のグレネードを足下に置き、周りを見渡した。

塊の中に、私は小さな目を見つけた。
僅かに見開かれたその目は、私をじっと見つめている。
ごぼごぼ、ごぼごぼ
目のすぐ脇に開いた穴から、もわりと何かが吐き出される。
苦しいのだ。判っている。
しかしそれも、もう終わりだ。
「追い詰めたぞ！　銃撃用意」
「待て！　培養槽が壊れるぞ」
「奴の身体だけを狙え、失敗は許されない」

大勢の警備員達が、培養室の入り口を塞ぐ。
そして私に銃を向ける。
照準レーザーが、私の身体に集中する。私は身体を見遣った。所々人工血液が洩れている。
がくり、と後ろ足が落ちた。先程の銃撃でダメージを受けたのだ。
しかしもう関係無い。
私はまた、水槽の中の、あの目を見つめる。
あの目は。
「ねこちゃん」
トシオ君。
ベッドの上で、病気と闘っていた。
あの目にそっくりだ。

「バアルや」
教授の顔が重なる。
優しい手の感触が私を包む。
「サヨ、さあおいで」
若々しい教授の笑みが。
私に。

「なああああおう」

さよなら。

「なああああああああああああああああああおおおおおおおおおうう」

＊　＊　＊

軍務省ビルの兵器開発棟を半壊させるほどの大事故は、実験中の人為的なミスとだけ発表された。

数十人の死者を出したわりには、ニュースの扱いは小さいものだった。

バアルの電子頭脳が停止した瞬間、その身体から発せられたエネルギーは、恐らく他の爆発物や燃料にも引火したのだろう。後にはバアルの在った形跡など、微塵も残らなかった。

あの日、バアルがショック状態に陥った後、私は悪用されるのを恐れて、大学のスーパーコンピューターに

残っていた妻の生体情報とバアルの電子頭脳のバックアップを、全て消去してしまった。そのせいで私は軍務省に監禁されたのだが、私の行動が正しかったのかどうか、今でも判らない。

しかし私には、そうするしかなかった。第二、第三のバアルが生まれることだけは、どうしても避けなければなかったからだ。

私はバアルの苦しみを、最後の最後まで、理解してあげられなかったような、そんな気がしてならない。

私は大学を辞めた。暫く一人になりたいと思った。

この悪夢のような時代に、私は人々のために、何が出来るだろう。それを考えたかったのだ。

まだ答えは出ない。しかし。

「バアル、君の魂は、きっとあるさ。きっと」

私は研究棟の裏にある、溶鉱炉のそばの記念碑に、小さなプレートを貼った。

あまたのロボット達の中に、バアルの名が加わった。

そして私は、ロケットペンダントに入った妻の写真の横に、バアルの写真をそっと、挟み込んだ。

後悔と苦悩に苛まれながらも、私は彼女等と共に生きてゆくのだ。

それが私の。

使命なのかも知れない。

「さあ、帰ろうか」

私はゆっくりと、家路に就いた。

おしまい

初出　第百五十一～三話　さよならトシオ君　上・中・下

『ねこバナ』　二〇一〇年二月二一～二三日

http://ameblo.jp/nekobana/

平成二十三年二月一日　印刷
平成二十三年二月三日　発行

さよならトシオ君

※非売品

猫花文庫

ねこバナ。

著者　佳(Kei)
発行者　マルやん
印刷者　佳(Kei)

卓上印刷

発行所　〇〇県〇〇市猫町二丁目二番地二号
猫花書店
電話×××・二二二一・二二二二

Don't think. Feel!